



下斗米先生の講演会に参加して

小川 久美子

10月26日、筑波大学東京キャンパスで行われた下斗米伸夫先生による講演会「ウクライナ戦争終結への道」は、私の待望の講演会でした。

2022年2月24日から始まったウクライナ特別軍事作戦には大きなショックを受けました。ソビエト連邦時代にモスクワで留学生活を送っていたときには、ロシア人とウクライナ人を別民族としては認識せず、日本で言えば、関東人と関西人の違いくらいに考えていました。ソ連邦崩壊で別々の国家となってからも、この認識が変わることはありませんでした。

日ロ交流協会は、市民レベルの草の根の文化交流を旨としています。私自身も、毀譽褒貶の政治や外交には重きを感じずにつきましたが、守備範囲の2国家が戦うとあつては無関心ではいられません。開戦後、テレビ、新聞、書籍、YouTubeと色々な情報を目にしました。ロシアの知人から生々しい話しを聞くこともありました。しかし、下斗米先生の講演会を心待ちにしていたのは、ウクライナ戦争に関する、事実に基づいた学術的な観点を学ぶ機会だったからです。

下斗米先生は、まずはキエフ公国から現代に至るまでの歴史をおさらい、そしてアラスカ米ロ首脳会談までの交渉の成り行きを話されました。



講演の中で特に興味深かったのは、ウクライナ戦争とアメリカの国内事情との関係でした。例えば、クリントンは、1993年にNATO東方拡大を主張することで、シカゴの票を獲得しました。アメリカの大統領選挙における各州の投票傾向を見ると、ペンシルベニアなど五大湖周辺に激戦州が集まっていますが、この地域には、19世紀末にロシア帝国内でのポグロムに耐えかねたポーランド系及びスラブ系のユダヤ人が移住しています。アメリカのローカル政治とグローバル戦略が繋がっていることが分かります。また面白いことに、この地域で鉄鋼業が盛んなのは、ロシア人とウクライナ人の共通の祖先とも言えるスキタイ人が、紀元前8世紀にクリミア周辺で鉄器を使用していたことに遡れます。

バイデン大統領時代のプリンケン国務長官、ヌーランド国務次官は、ポグロムでアメリカに逃れてきた東欧系ユダヤ人の子孫です。これに関係するかどうかは分かりませんが、ふたりともウクライナ戦争に積極的に関与しています。また、第二次世界大戦後には、ナチスに加担した150万人が西部ウクライナからカナダに移住したと言われています。この戦争には、歴史の複雑に絡んだ糸が世界的な広がりで影響を与えているようです。

1993年2月発行の広報誌に掲載されているカルパチア・ウクライナでのフェスティバルに関する記事には、奇しくもその地方の歴史、民族問題の複雑さが書かれていました。島国の人たちには計り知れない歴史とアメリカの政策により引き起こされた代理戦争が一日も早く終結することを祈らずにはいられません。 (常任理事)